

## 「バンカラ」に鍛えられた精神力



在学中はコーラス部。「今も同窓生と歌っています」と荒木葉子さん

1950年、甲府一高は男女共学になった。質実剛健でバンカラな校風の中、女子生徒は鍛えられた。

内科医の荒木葉子さん(58、1976年卒)を入学直後に待ち受けていたのは応援団による応援の練習指導だった。校歌や応援歌を大きな声で歌わされたり、木の椅子の上に乗せられたり。そうしたことが1、2週間続いた。

「バンカラとは聞いていたけど、びっくりしました。通過儀礼だったんでしょうね」

数学が好きだった。2年生になってコース別に分かれると、国立理系クラスには女子が15人ほどしかいなかった。「人数

は少なくても、男子には負けたくない」という気持ちから、勉強にも力が入った。

「職業婦人」にあこがれて慶応義塾大学医学部に進学。内科医になった。27歳で長女を出産。子育てをしながら働き続けることの大変さをつくづく痛感した。「大学までは男女で条件は同じなのに、社会は女性が仕事を継続することに冷たい」そんな思いから、19

97年、医師や学者、ジャーナリストらによる「性と健康を考える女性専門家の会」に加わり、女性労働者の健康管理に力を注いできた。

「女性は好奇心とネットワークと長寿で勝負すればいい。キャリアは一生、楽しく築くもの」  
へこたれない強さは甲府一高で身につけた。

女優の筒井真理子さん(55、79年卒)も応援練習で洗礼を受けた1人だ。「社会に出てからのささいな理不尽への忍耐力は、これでついたかな」と笑う。

在校中はフィギュアスケート部に所属。冬は富士急ハイランド(山梨県富士吉田市)のスケートリンクで合宿した。早朝4時から練習し、暗闇に浮かぶ真っ白な富士山の姿が怖かったことが印象に残っている。

小学校のころから宿題もせず、高校でも勉強をした記憶はあまりない。部活動をしたり、友人と過ごしたりする時間が楽しくて、高校の三者面談で「部活をやめなさい」と先生に言われるほどだった。

青山学院大学に進学したが、友人が多く通っていた早稲田大学に遊びに行き、自由な雰囲気が入った。翌年早稲田を受験し、入学した。

東京に出てから芝居をよく見るようになった。「私にもできよう」と感じていた。早大2年のとき、演劇研究会内の劇団として、鴻上尚史さんらが立ち上げた第三舞台に入った。以来、芝居人生が続く。



男子より距離が短い強行遠足で、3年のとき3位に。「意地で走り続けました」と筒井真理子さん

心理カウンセラーという夢もあったが、芝居はそれに通じるものがあった。「演じる役の人柄などを深く知ろうとしないと演じきれない。自分を演じるだけになってしまいうから。さまざまな役に向き合うことが楽しくて、飽きることはない」